

ウマ娘 ~ダート・ダート・ダート!!~

フジキセキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘、それは異世界の競走馬の名前と魂を受け継いで生まれてきた少女たち。

彼女達は狭き門を潜り抜けトレセン学園に在籍し、国民的スポーツ・エンターテイメント「トウインクル・シリーズ」への参加に向けて特訓に励んでいる。

アンドレアモン、彼女もまたトレセン学園に通うウマ娘であるが、入学以来の戦績は鳴かず飛ばず。

失意の中、彼女は一人のトレーナーに出会い、ダートの世界へと足を踏み入れる

目次

0 R	プロローグ	1
1 R	出会い、始まり	4
2 R	即席コンビ	8
3 R	生き残りをかけて	11
4 R	運命のレース!……ちよつと前	14
5 R	トップをねらえ	17

OR プロローグ

雲一つない青空の下、土煙を巻き上げながら茶褐色の髪をなびかせ疾駆する影があった。

それはカーブをすべるように曲がり、直線コースに差し掛かる。

中京競馬場の400メートルを超える長い長い直線、それをものともせず彗星のごとく駆け抜ける。

疲れを知らないその末足はぐんぐんと伸び、後続を煙の中に置き去りにしていった。

歓声上がる、紙が舞う、そして拍手が沸き上がる。

ようやく息も絶え絶えにした後続たちがゴールにたどり着き、掲示板に確定の文字が上がった。

それと同時にもうひと際歓声が大きくなった。

観客立ちの視線の先にあるもの――

2：18.1 レコード

歓声に包まれた2200メートルの勝者は満足げにそれを眺めている。重賞とよばれる選ばれた者のみが挑めるレースでありながら圧倒的な力を見せつけた。

勝者の名は、アンドレアモン。

これは彼女が、砂上の皇帝と呼ばれるまでの物語。

「ウマ娘」

それは異世界の競走馬の名前と魂を受け継いで生まれてきた少女たち。

(その異世界でいうところの馬の)尻尾と耳を生やし、超人的な走力を有するが、それ以外は普通の女の子だ。

トレセン学園に在籍し、国民的スポーツ・エンターテイメント「トウインクル・シリーズ」への参加に向けて特訓に励んでいる。

とはいえずすべてのウマ娘たちがこのトレセン学園に入学できるわけではない。

その道なりは険しく、もって生まれた素質才能、家柄や家系など多岐にわたる審査を経て、初めてその許可をうけるのだ。

ここ、「日本ウマ娘トレーニングセンター学園」は全国のウマ娘トレーニング施設の中でも最新鋭かつ最大規模の施設であり、在籍するウマ娘の数もレベルも日本一といえる。

ここまでの狭き門を潜り抜けたからには、さぞかし活躍していくのだろう―

かというと、そうではなかった。

そこは厳しい勝負の世界、鳴かず飛ばずのまま時がたち、退学という末路をたどったウマ娘達なんてごまんという。

それでも彼女たちは競争への熱意を絶やすことはない。

それは本能でもあるし、なによりウイニングライブへの憧れがあるからだった。

とはいえその誉を受けられるウマ娘はやはり一握り。

さてこの場にいる一人のウマ娘―その名はアンドレアモンといった―もまた、成績が振るわず退学の危機に瀕している者の一人であった。

「アンドレアモンさん、何故呼び出されたのか…わかっていますね？」

「…はい」

アンドレアモン、と呼ばれたウマ娘はその頭も耳も項垂れさせ、目を伏せながらうなずいた。

相對する女史は一瞥をくると、ボードに挟まれた数枚の書類をめぐった。

「この一年間での成績、初戦では2番人気に支持されるも結果は15着、続く2戦目3戦目も勝ち馬にも入らず…。わかっているとは思いますがこのままの結果では退学もありえます」

「はい…」

力なくうなずくアンドレアモン。女史はさらに言葉をつづけた。

「あなたの入学は去年度の11月ですから半年、つまり今年度5月ま

でに1勝すること。これが学園に残るための条件です」

「5月までに1勝…」

「…アンドレアモン、何とかしてあげたいけどこれは規則です。なにもあなたが憎くて言っているわけではないわ」

「もちろんです、それは…わかっています」

「…勝ちなさい、アンドレアモン」

「はい…ありがとうございます。失礼しました…」

一礼とともにアンドレアモンが退室していく、トレーナー室には沈黙が訪れた。

ため息は春の日差しに溶けていった。

1 R 出会い、始まり

アンドレアモンは寮までの道のりを、ひどく重い足取りで歩いていた。

桜並木にぽつぽつと花が咲き始め、あたたかな日差しの中で揺れている。その景色すら、今は自分をあざ笑っているかのようだった。

「はあ…」

零れたため息は体の奥底に降り積もり、斥量のようにのしかかる。

ふと空を仰ぎ見ると、今の心持ちとは裏腹にどこまでも広がる快晴の空だ。

「ここまで、なのかなあ」

アンドレアモンは青森にその生を受けた。

フランスの父と日本の母の間にウマ娘として生まれるが、その血筋に興味を持ったことは多くはなかった。だからこそトレセン学園への入学が許されたとき、彼女自身は驚きの方が強かったことを覚えている。

調べてみればその祖先にはイギリスで実績を重ねたウマ娘を持ち、会った記憶こそ希薄ではあるが親戚に天皇賞経験をもつウマ娘さえいた。

そうして自らに流れる血について知れば知るほど、体に迸る「走ること」への欲求に納得できてしまうのだった。

故郷の五戸という町は海にも山にも近く、彼女は暇さえあれば常に走っていた。弧を描いて水平線が広がる太平洋を望みながら、ただひたすらに砂浜を走った。風が火照る肌を撫でていく感覚がたまらなく好きだった。

トレセン学園への入学の話が持ち上がれば、両親の後押しもありとんとん拍子に事が進んだ。あつという間に手続きが進み、気が付けばパンパンのボストンバッグとともに電車に詰め込まれ上京していたような気さえする。

町民全員に見送られ踏み出した新たな門出は、順調なもののように思えた。

しかしトウインクル・シリーズへの挑戦は恐ろしいほどに険しい道のりだ。

勝つために走り、走るために勝つ。

今まで勝ちに拘る競争をした経験のないアンドレアモンにとって、トレセン学園での日々は困惑することばかりであった。体の使い方、コースの走り方、レースの戦い方。目新しさ溢れるそれらに完全に適応できたかといえばウソになる。

名家出身のウマ娘たちのなかには英才教育を施されてきたとの話や私塾に通っていたなどと聞くこともあり、更なるプレッシャーに苛まれることもあった。

結果を急げば急ぐほど、焦りが着順に現れてくる。その悪循環を断てないまま一年が経ってしまった。

そして残り5か月との宣告。

彼女が途方に暮れるのも仕方のないことだろう。

「はあ…」

何度目かわからないため息を吐き出したアンドレアモン。ふと顔を上げるとどうやら気づかないうちに坂路コース脇の土手沿いまで歩いてきていたようだった。

ウツドチップが醸し出す香りが鼻をくすぐる。

芝に腰を下ろし何度も走った道を目前にしていると、春の陽気と日差しも手伝って睡魔に襲われる。数分もすれば船を漕ぎ始め、いつしかアンドレアモンは傾きだした日差しの下で眠りについた。

*

「…い、起…ろー…」

「ん…」

陽はすっかり落ち、辺りはすっかり闇に包まれている。

昼間の気温は上向き始めているが、帳が落ちてしまえばまだまだ肌寒い季節だ。

「おーい、そろそろ寮に帰らないとまずいんじゃないのかー?」

「あと5分…」

「随分とまあお約束な返しを、でも寮の門限過ぎてんじゃないのか?」

男がそう言うのと、アンドレアモンの長い耳がわずかに脈打つ。

「りょう…？門限…っ！」

「いつてえー！」

その二語が覚醒の引き金となったのか、彼女は文字通り飛び起きた。となると当然、顔を覗き込むようにしていた男と額を勝ち合わせることになるわけで。男は情けのないうめき声をあげながら芝の上を転がりまわる。同じく額を赤くしたアンドレアモンは平謝りである。

「あ、あのー…ごめんなさい！すいません！」

「いてて…ああいやこっちこそいきなり声かけちまって悪かったな」

額をさすりながら男は答えた。腰を上げて土を払うと、彼女に向けて手を差し出した。

その手を恐る恐る掴むと、アンドレアモンも引き起こされる形になった。

「キミ、ここの生徒だろ？」

「え、はい…一応」

「やつぱり。丁度よかった、道を案内してもらえないか？明日から赴任する予定なんだが、肝心の宿舎の場所もなにもかもわからなくてさ」

「でもその…門限が」

「新しく赴任してきた人に道案内してましたっていえばいいさ、それなら君も咎められないだろ」

「それはそうかも…。えーと、赴任…ですか？」

アンドレアモンが首をかしげていると、苦笑しながら男は答えた。

「明日から俺も、この学園のトレーナー、ってわけ」

「トレーナーさんだったんですか、すごいです！」

「はは。まだペーパーだけだね」

他愛ない会話とともに、アンドレアモンは先導して校舎のほうへ歩みを進めた。

空には星が瞬く夜。

これがアンドレアモンとトレーナーの運命の出会いだった。

ちなみにトレーナーの名前を聞き忘れたアンドレアモンは、言い訳が通じずこの後寮長に滅茶苦茶怒られた。

2R 即席コンビ

「昨日は散々な目にあった…」

「でも良かったじゃない、反省文だけで済んだんだから」

「それは、そうなんだけど…」

自らをトレーナーだと称す男を職員棟などに案内し、寮に戻ってきたアンドレアモンを待っていたのは寮長フジキセキであった。大義名分をかざそうとした彼女だったが、名前も聞いていないとなれば当然疑われる。

普段の素行のお陰であまり大ごとにはならず済んだが初めて書く反省文に辟易してしまったようだった。

「あ、そうそう。今日から私のクラスに新しい娘が来るらしいの」

「へえ：マルゼンスキーのクラスに新入生ねえ」

「本当は昨日くる予定だったらしいんだけど、大遅刻したみたいよ」

「そういえばフジキセキも言ってたかも：『これで今日2人目だ』って」

マルゼンスキーの穏やかな笑みは、昨夜頭を抱えて嘆いていたフジキセキとは対照的で思わず苦笑を返した。

しばらく談笑を続けていたが、マルゼンスキーはくりギル>の集まりがあるようで、二人は別れ、アンドレアモンは資料室に向かうことにした。

*

「あと一か月：学期末査定の為には重賞を勝っておきたいけど、まずは一勝しないと…。オープンか未勝利か」

アンドレアモンは手元の端末を穴をあける勢いで読み進めている。残りの期間と調教をかんがえ、出走し勝てるレースを探す為だった。

—この世界における未勝利戦は、トライアウト、生き残り戦のような側面が強い。異世界でどれだけ戦績を残していても、入学する時期によってはなかなか勝てないことも多々ある。そして一日に何度も行われるものでもないの—

「やっぱりこの時期になると登録数が多いなあ…」

ほぼ16頭以上出走する未勝利戦は激戦の様相を呈していた。

目頭を押さえ疲れた目を休ませる。出れたとして2レース、そう考
えるとなかなか登録が進まない。椅子に深く持たれかけて伸びをし
ていると不意に肩がたたかれた。

「よっ」

「ひゃあ！って昨日の！びっくりしたあ…」

「ごめんな、隣いいか？」

見ればトレーナーは分厚いファイルをいくつか腕に抱えていた。
どうやら空いているテーブルを探しているようだ。アンドレアモン
はどうぞ、と右手を差し出して答えた。

「トレーナー、さんは何をなさってるんですか？沢山資料を集めてる
みたいですけど」

「ああ。チームの打診があつてな、今在籍ウマ娘について目を通して
いるんだ」

トレセン学園ではトレーナーがチームを主催することがある。ス
カウトや入部テストを経て所属することができれば、施設利用の優遇
やトレーナーによる指導を得ることができる。とあつてその競争率
は激しいものだ。

正直なところ今のアンドレアモンにとっては縁のない話だと思っ
ていた。勿論羨望の思いはあるが。

そんな表情が出ていたのか、トレーナーは困ったような表情を浮か
べながら尋ねる。

「…なにかあつたのか？」

「その…何も無いからこうなつたというか…」

アンドレアモンはトレーナーに今の状況を説明した。

目を閉じて腕を組んで黙って聞いていたトレーナーは、聞き終わる
や否やアンドレアモンを質問攻めににした。

「前走からの増減は？タイムは？脚質末脚で言われたことはないか
？」

「ま、待って下さいーい、いきなりいわれても」

困惑するアンドレアモンに、トレーナーはファイルをめくりながら

続けた。

「そんな話を聞いてしまったら手助けしてやりたくなるのがトレーナーってもんだ。昨日の恩返しとでも思ってくれ。…迷惑か？」

「い、いえそんなことは…で、でもいいんでしょうか、私なんか…。それにトレーナーさんだってお忙しいのでは？」

チームの結成もあるのでは、と心配するアンドレアモンだったが、トレーナーはくりギル＜スピカ＞の2チームがあるためになかなか割って入るのが難しく路線が定まっていなさと説明した。

正直に言えばトレーナーをほぼ独占できるのは願ってもないことだ。このような状況ならば尚更だ。

「おねがいます…トレーナーさん！」

「トレーナー、でいい。頑張って一勝、もぎ取ろうな」

「はい！」

勝利、学園在籍に向けて希望が見えてきた、ようであったが、アンドレアモンの心中にはどこか引つかかるものがあった。

窓の外で、強い風が櫂がなびかせた。

3R 生き残りをかけて

「アンドレアモン！頭が高くなってるぞ！」

「はいー！」

トレセン学園の調教施設の一角に、トレーナーとアンドレアモンの姿があった。ロードランナーの上で懸命に足を上げるアンドレアモンの額には大粒の汗が輝いている。

「よし、一度休憩にしようか」

「は、はい…」

トレーナーがロードランナーのスイッチを操作すると、ベルトの巻き取りはだんだんとゆっくりとなり、やがて止まる。荒い息をしながらアンドレアモンもその足運びを徐々に落とし、数分ぶりに床に足をつけた。

「お疲れ様、なかなかいい感じじゃないか。体力面では申し分ないぞ」
「そ、そうですか？ありがとうございます…こんなバテバテですけど…」

アンドレアモンは呼吸を整えようと大きく息をはいた。トレーナーと共に勝利に向かって歩み始めてから一週間が経とうとしている。ここまでで砂路や坂路での走り込みを中心に調整を行っている。

メニュー自体は変哲のないものであるが、それでもアンドレアモンの中では今までにない、確かな充足感があった。

「ストライドもピッチもそこまで悪くない、順調だな」

「…でもやっぱり不安の方が強いです」

とはいえ完全に心機一転、と吹っ切れたわけではなかった。心に影を落とす唯一の懸念、その一週間前のやり取りを思い出す。

アンドレアモンは立ち上がるとそつと窓を開けた。

*

「ええ!?!ダートですか?」

さて一週間前、資料室で再び相見えた二人はアンドレアモンの一勝のために協力関係となった。その後いざ登録するレースを決めようとなった際の、トレーナーの発言こそ、冒頭の彼女の驚きの原因であ

る。

目を見開き、口がふさがらないアンドレアモン。それもそのはず、彼女は今までレースでダートコースを走った経験が無い。一般的に芝とは求められるものが違うとも言われているダートレースに出走することは博打を打つのに等しいとも思えた。

困惑しきるアンドレアモンを横目にトレーナーは意気揚々と説明を続けた。

「アンドレアモンさんにダートの適性がある可能性もあるだろう？こういう状況なら試してみるのもありだと思っただ」

「あ、呼び捨てで構いませんよ、トレーナー。…そういうもの、でしょうか」

というのも、アンドレアモンの血統、これを見る限りあまり自分がダート向きのウマ娘であるとはなかなか思えなかつたためだ。確かに長距離の得意な親類はいるし、秋天や菊花に出たウマ娘もいるがこれは当然芝のウマ娘だ。

これを知っているわけだから、ダートが得意と考えることはなかなか難しい。

「それにな…」

「なんででしょうか？」

首を小さく傾げた彼女に、トレーナーは微笑みながら言う。

「これはまあ、勘だけど…アンドレアモン、君はダートで走りそうな気がするんだよ」

不思議な人だとアンドレアモンは思った。まだ出会ってすぐだというのに、落第の烙印を押されかけている自分に、初めて出会ったかと肩入れして。

しかしそこに打算的な物を感じない。突飛な提案であっても受け入れてみよう、そう彼女は感じた。

「わかりました、次走はダートでいきます！」

*

ダートと芝ではまず走り方が違うと言われる。

芝が得意なウマ娘は、後足では強靱なバネ、キック力を活かして前

に進み、前足は地面を払うようにして前に伸ばす。

対してダートが得意なウマ娘は、前足を上に持ち上げて地面を叩きつけるような走り方が一般的だ。

砂路では足が沈みこむため、芝の走り方では上手くないことが多い。

走り方の習得に始まった二人の特訓は二週間の間続いた。レースの日は刻一刻と近づいている。

4 R 運命のレース!…ちよつと前

朝は誰にでも平等に訪れる。

違いがあるとすれば、その朝が当人にとってどんな朝であるか。彼女にとつてはついに出走の日である。

やけにすつきりとした目覚めを迎えたアンドレアモンはベッドから抜け出すと、カーテンを開け放つ。

部屋に差し込む日差しに目を細め、一息吐けばようやく起きてきた緊張がアンドレアモンの気を張りつめさせる。

「トレーナーも言ってた、緊張するのが当たり前、だから、大丈夫…」
言い聞かせるように呟けば、肩の力が抜けていくような感覚を得る。やれるだけのことはやった、準備は万全だと、何度も何度も震える体に言い聞かせた。

「…よしー」

脱衣場で寝巻きを脱ぎ、シャワーを浴びる。髪を乾かし、すき、制服を着る。毎朝毎朝、何度も繰り返した行為だが、なぜか新鮮さを感じていた。

鞆に白と赤を基調とした簡易的なレース用の服と、靴を丁寧に入れる。

電気を消して、ガスの元栓を閉じ、戸締まりを確認したアンドレアモンは胸を張って部屋を出た。

*

トレーナーとの練習は驚くほど順調に消化された。

つい先日におこなった追いきりのタイムも悪くない。

万全を期した調教によるものなのか、もともと砂路への適性があったのか、そこまではトレーナーには判断できなかつたが、間違いなく次のレースで連対に入ることには確信していた。

「そう、だから大丈夫だ。緊張らずに走ってこい」

「簡単にありますけど…」

競馬新聞片手に笑うトレーナーとは対照的に、レースまでの猶予が減っていくことにアンドレアモンはナーバスな気分になっていた。

とはいえトレーナーも気にはしているようで、チラチラと腕時計を覗いている。

「なあ、アンドレアモン。一つ教えてくれないか？」

「なんででしょう？」

「君は…どうして走る？」

「え？」

トレーナーの放った言葉はアンドレアモンの心に何度も反響した。なぜ、との問いへの答えはいつまでたっても思い付かなかった。

とても長い時間考えていたような気持ちだったが実際にはものの数秒だったようで、慌てたトレーナーの声がアンドレアモンを現実に取り戻した。

「ああいや！トレーナー試験を受けるために何人かのウマ娘とは接してきたんだが、みんなファンのためにみたいな答えをするからさ、アンドレアモンもそうなのかなって」

「ああ…そうですね。応援してくれるファンのために走る、とても大事なことです。学園でもそう習いましたし」

でも、と言葉を続けようとしたがノックの音がそれを遮る。控え室に入ってきたのは――

「レース前に失礼する、トレーナー殿は…ああいらつしやるな」

トレセン学園生徒会長、シンボリルドルフだった。

「シンボリルドルフ、先輩…？」

「これは生徒会長、自分に何か？」

「先日のお話の件で、正式に認可が降りましたのでご通達に」

「直々にどうも、生徒会長を使い走りにするなんてとんだ怖いもの知らずですね」

「なにを隠そう、リギルのトレーナーの…」

「…怖いもの知らずは私の方か、今のはオフレコでお願いします」

「ふふ、面白い御仁だ。貴方があたらしくチームを作ってくださいれば、学園もより活性化するでしょう。こちらとしても大変ありがたいのです」

シンボリルドルフはトレーナーに茶封筒を手渡す。アンドレアモ

ンはその会話を黙って見つめてることしかできなかつた。

「では、私はこれで失礼します」

「どうもありがとう、会長さん。これからよろしく」

「ええ。…アンドレアモン」

シンボリドルフとトレーナーが握手を交わす。トレーナーは先だつて控え室の扉を開けてシンボリドルフを待った。それに会釈で返した生徒会長はアンドレアモンに向き直って声をかけた。

「は、はい！」

「レース、頑張りなさい」

「…はい！」

微笑みを残すとシンボリドルフは部屋を去った。

トレーナーが声をかけるまで、アンドレアモンはしばし放心していた。

「おーいアンドレアモン、生きてるか？」

「は、はい！…と、トレーナー！聞きましたか?!頑張りなさいって！」

「はいはい、良かったな。つたく会長の求心力も考えものだな…。

じゃあ期待に応えるためにもレース、勝つぞ？」

「はい！」

今から思えばこれが皇帝と彼女の初遭遇と言っても良いだろう。

よくも悪くも、この出会いはトレーナーの問いへの迷いをアンドレアモンに忘れさせた。

レースはすぐ目の前。

5R トップをねらえ

「よし、そろそろ時間だ」

トレーナーはその言葉の為に何度腕時計に目線を送ったのだろうか。

アンドレアモンは含み笑いを浮かべた。

「それじゃ、着替えてきます」

「おう」

椅子に置いた鞆を持つと、彼女は更衣室へと向かう。

会長が去った後、再び二人だけになった部屋の沈黙を紛らわせようとするトレーナーの姿を見ていたアンドレアモンは不思議と緊張はしなくなっていた。自分よりもテンパっている人を見ると冷静になるあれだ。

それを差し引いても気分が軽い。今までのレース前がいつも重い足取りだったのが嘘のようだった。

なにが違うのか、考えても練習の質が大きく変わったわけでもない。

だが決定的に何かが変わった。それはやはりトレーナーの存在によるものなのだろうか。

*

「さあ未勝利戦まもなく出走です！」

誰かのラジオからこぼれる音。コンコースの混雑が激しくなり始めた。

スタンドの人影は増え、黒山とまではいかないがそれでも人だかりはでき始めている。

勿論多くの観客はこの後のメインレースの為に来ているのだろうが、それでも自分を見してくれるファンに違いはない。

アンドレアモンは大きく息を吸った。

スタートから数十メートルは芝を走る。念には念を、アンドレアモンが最後に軽いストレッチをしていると反対側のウィナーズサークル近くからファンファーレが聞こえてきた。トランペットが奏でる

音色は不思議なもので自然と力が湧いてくる。

とはいえ音色に聞きほれている時間はない。忙しく動く誘導員たちが指示を出した。それに従いウマ娘たちが枠へと向かう。

アンドレアモンもそれに続いた。

順々に収まっていく中各々のルーティンをこなす。アンドレアモンもゲートの中でスタートの姿勢をとり、目を閉じ動きを止める。自分のこれからを左右するレースにも拘らず、心中は驚くほどに穏やかだった。

最後のウマ娘が収まったようだ。レースの始まりを感じ踵に力が入る。

ゲートが開かれた。

「態勢整い、スタートしました！」

後ろ足で地面をえぐるようにけり出し、アンドレアモンは飛び出した。

上々のスタートだ。

内枠にいたウマ娘が好位置を維持すべく少し前にでるが、外枠のウマ娘がそれを遮るように少し掛かり気味に出していく。

前が詰まることを恐れたのか上がるウマ娘が数人で縦に長い馬群となった。

そんな中、アンドレアモンはというと流れに逆らうことなく中盤にいた。

「先頭はノースピグラムであります、内側からキーシルバーがいきます……そして中盤後方にアンドレアモン、外から上がります……最後方はトウシユウオリオンとなっております」

(中盤で足を貯めて……内は、詰まりそう)

先頭集団が一塊になり前に抜けられそうにない。そう判断すると予定通りアンドレアモンは少しずつ外へと流れていった。土煙が立ち上がり跳ねあげられた砂塵が宙を舞う。

ペースが早い。先頭はもう第四コーナーに差し掛かろうとしている。ここを抜ければ、直線――

アンドレアモンはレース前のトレーナーの言葉を思い出していた。

「アンドレアモン、今回のレースは最後の直線で差せ。お前ならそれができるはずだ」

「差し、ですか？距離的にはあまりよくない気がしますが…」

「それは勿論そうなんだが、枠が真ん中なんだ、有利な位置を取れるとも限らない。それにお前はスタミナも末脚もかなりいいものを持つてる。前をふさがれてインに飛び込むよりかは外を回っていくことを考えておいたほうがいいと思うんだ」

実際、今眼前は壁になっている。この合間を縫っていくのは至難の業だろう。

それならばトレーナーが信じてくれた体力と最後の直線にかけよう。力は確かにまだ余裕がある。

アンドレアモンはできるだけ前の集団に離されることのないように四コーナーを回る。

「四コーナー回りまして先頭はエンジンサンルイズ、ノースピグラム！」

直線に差し掛かる。少し外を回ったアンドレアモンの前に、道は開けていた。

(……！)

一気に加速をつけ全力で先行馬との差を詰めていく。

先頭のペースに合わせてしまったウマ娘達―やはり高速馬場にいったばいといった最後の加速が追い付いていない―を横目にぐんぐん前に出る。

「先頭はノースピグラムこのまま逃げ切るか！…おっと一番外からアンドレアモンが突っ込んできた！」

無心で前に足を繰り出す。壁の向こうで見えなかった背中がついに手が届きそうな距離まで近づいた。

砂は足をからめとろうとするように蠢いている。それでもアンドレアモンはその背中追いかけた。

しかしなかなかその差は縮まらない。先頭2馬も意地でも逃げようと必死だ。決定機を迎えぬままゴール板が視界に映るようになった。もう直線も残り少ない。

(だめ、追いつけない…)

あと一メートルが無限のように感じられる。この手は届かない。すなわち、負ける。

(もう無…)

その言葉を吐露する寸前であった。はつきりと、何千人という会場で、叫び声が飛び交う中で、それでも

「アンドレアモン！あきらめんな！行けえ！」

トレーナーの声が聞こえた。

まだ勝負を諦めていなかった。ゴールの前で声をからして、勝とうが負けようが己には全く関係のないウマ娘のために、諦めずに勝利を信じている。

ならば、自分が勝負を諦めることができようか。

「負けるもんかああああああ」

今のままで追いつけ無いのなら、今より早く、今より強く。アンドレアモンのピッチが上がる。

先頭の二人に並び、そして向かうはその前！

「アンドレアモンが突っ込んできたぞ！物凄い勢いだ、アンドレアモン！ノースピグラム、アンドレアモン並んだ、アンドレアモン！アンドレアモン差し切ったあ！」